

ほわり、

ひなた にこ

もくじ

1. 泡滅(ほうめつ)
2. one すぷーん
3. ブルースカイ
4. キミイロ
5. そよ
6. カラーに染まる味
7. パラパラキラキラ
8. 淡く儂い
9. 罅割れグラスビュー
10. メランコリーキャンディー
11. 街
12. 雨を聴く
13. ハピネス
14. ホーム
15. 偏西風に負けた彼女
16. 蒼く澄んだ世界は狭い。
17. 夏から秋へと向かう
18. またいつか
19. ふつふつ、と
20. だれかきて

君の小さく薄っぺらい手

掴んで

絡めて

必死だった

刹那

君の身体を離してしまえば

きっと泡のように消えてしまう

ああきっとそうだ

君のこと

きっとその儂い笑みに

暖かく冷たい身体を解して

泡のように消えてしまうのだ

僕の一番恐れることが

そんなにも

あっさりと

なんてこと

あつてはいけない

僕が

その腕

そのカラダ

君の隅から隅まで

守るよ

魔法って信じる？

僕は信じる

君の言葉に

今まで感じたことの無かった

温かみを感じたから

君の笑顔に

今まで感じたことの無かった

トキメキを感じたから

君のくれるものには

カタチが有っても

無くても

優しさの味付けがされていて

ほんの少しのことなのに

それを感じ取ることが

僕の喜びだから

だから僕は

魔法を信じる

久々に見た青に

透き通り

融かされる

雄大すぎて

受け止められず

ボクは

泣きたくなる

晴れた空には

悲しい顔がなく

ボクは切なくなる

手を伸ばして

眼を細めれば

きっと

消えてしまうボク

青い空に

白い雲

ありきたりに

ボクは

幸せになる

どこまでも続く

色の鮮やかな変化に

果てしなく

言葉を失くし

眼は閉じず

ボクの見上げる空は

今日も青い

大切に

キミイロ。

たくさんのイロの中で

生きていくけれど

それでもキミのイロ

誰にも染められないで

キミが泣いても

笑っても

溢れてくる

キミのイロ

どんどん

魅了されていく

無限の中の

キミイロ。

触れる

靡く

冷たい風が

艶やかな髪が

囁き合うのは

冬の寒さに

揺れる枯葉

はしり抜けるのは

大地を撫でる

凍った空気

遠く遠く飛ばされて

私の身体も

そよそよ

そよそよ

微かに

笑う

そよそよ

そよそよ

全てが循環して

また新しくなる日まで

おやすみなさい

おやすみなさい

雫が落ちた

道路に着地して、コンクリート色になった

指先が花びらに触れた

白っぽい色だったから、それっぽい色になった

鍔の広い帽子を被った

綺麗な黄緑色をしていたから、小鳥たちが寄ってきた

虹を見た

周りが華やかになった

ふと誰かを思い浮かべた

ちょうどアイスクリームを食べているところだったから

口の中がおいしい色になった

ちりばめられた粉砂糖

甘くなりすぎないように

そっと指先で拾い上げ

丁寧に降らせる

蕩けてしまいそうな

柔らかくて

穏やかな

心地良い甘み

ボクだけのもの

降り続ける甘い雪

受け止める手に

きみの手を

一瞬にして

景色が

画と化す

淡く儂く

また心地良く

薄い膜に包まれる

ふわふわ

ふわふわ

どこまでも行ける

何でも出来る

そんな気持ちに

させられる

してくれる

淡く儂く

この季節には

魔法が潜む

少し触れただけ

簡単に罅割れたそれ

僕たちに

亀裂を入れて

夢見たセカイは

百分割されて

拾い集めたセカイのカケラ

脆い僕らは

それでもきちんと

夢をみる

憂鬱は

融けて

流れて

キャンディーの様に

ボクを

甘く柔らかく

包み込む

暖かな日差し

いつもの場所に

いつもの時間

だけど少し

違うのは

普段は見えないものが

見えてきたり

聞こえない音に

耳を傾けたり・・・

線路を渡るのを

戸惑うネコ

静かに揺れる

窓のカーテン

足取りも

軽くなる

暖かな日差しを浴びながら

異世界を

歩いてみる

私の

愛しい街

雨が降っている

私は寝起きの身体で雨の音を聴く

染み込んでいくように流れるその音は

私の全てをキレイにしていく

今日はどんな雨だろう

バケツをひっくり返したような雨？

シャワーのような雨？

傘に当たる雨の粒

拍手のような音がする

水溜りに落ちて、円を描く

そして消えていく

雨が上がった

胸いっぱい空気を吸い込むと

洗われた空気が肺を満たす

今度はどんな雨が降るかしら

ありがとうが

好きだよ

幸せを

運んでくれる

何気ない一言で

だけど

口に出すのは

なんだか恥ずかしい

ありがとうって

とっても

とっても

嬉しいんだ

それが

癖になるのは

難しい

だけど

言えたら

小さな幸福が

心の中に

湧き上がる

ありがとう

心のこもった

感謝の言葉を

誰かに

幸せを

そして

ありがとう・・・

ここが

私の帰る場所

どこにもない唯一の場所

どうでもいいことも

嬉しかったことも

辛かったことも

何もかもを持ち帰って

一番開放される場所

だから

甘えが必要になる

泣いたっていい

怒ったっていい

ここが

すべてを受け止めてくれる場所

ここが

私の帰る場所

むつかしいことばかり

タブーなことばかり

世の中そんな感じ

押し倒されないように

なぎ倒し返すのだから

お互い様

強く吹けばいいと

勘違いしているみたい

目も当てられない

寂しがり屋が弱いもの

強がり是不利なもの

狡い

負けないわ

負けたけど

今度はコンタクトレンズを外して

手に力を入れて

勇んで行くわ

蒼く澄んだ世界は狭い。

見渡した

そうしたところで見当たらない

あれれと首を傾げて

ぽきぽきと骨を鳴らしてみる

悲鳴を上げる

蒼く澄んだ世界は

決して広くはない

このベビーピンクな空は

下りゆく水分を飾り立てて

たちまちに

誘い音

蒼く澄んだ世界は

僕に刃向かう狂気だから

僕は大声で唄うのさ

たくさん嫌なこともあった

けれど

それをはるかに越える良いことが

短い夏に凝縮されていた

水溜まりに写る空を見ていた僕は

変わり行く季節の風に促されて

顔を上げた

眼に写った空は

広すぎて

高すぎて

何もかも

吸い取ってしまうかのように

圧倒的で

流れていく眩しい雲に眼を細めると

どこからか

そっと、秋の香りがした

雪が降る

寒さは増す

指先が染まり

息は真白

ホームには

鉄の箱

遠慮なく

滑りこむ

手袋を

脱ぎ捨てた

きみの手に

きみに

ふれたくて

震えている

扉が

閉まる

さよならは

言わない

ただ

静かに

静かに

手を振る

“またね”

舞い降りる

雪の重みに

かすかにゆれる

葉のように

震えていたのは

誰かしら

ふつつ、と

人が夢を追えば

それはいつしかほろほろ、と

はかなく解けてしまうのです

えいせいぼうろのよう

するする、と

それでいて

やさしく

やさしく

見失うことは

おそろしい

やさしい嘘も

ざんこくなまでの愛も

ほんとはそんなものがないことくらい

知っている

追いかけてしまうのは

どこかでだれでも

知ってしまっているからだ

だから

ふつつ、と

なにかがわきあがるその一瞬(とき)

靴がなかりうと

服がなかりうと

進むしかないのです

おひさまが

やけにやさしい日

ぼくは

からだをつきさすような

さむさが恋しい

くもたちが

やけにぶあつい日

ぼくは

ないぞうからあせばむような

つゆが恋しい

まわりがやけに

しずかな日

ぼくは

ぼくを

みうしなう

だから

まちがないよ、と

諭してくれる

だれかがほしい

あとがき

はじめまして、おはようございます、こんにちは、こんばんは。
ひなたにこと申します。

この度は『ほわり、』を読んでいただき本当にありがとうございます。

この『ほわり、』は、恋愛とかというよりは、自分の気持ちのままに、感じたままに綴ったものを集めたものです。

初めて、自分の書いた詩を、テーマというほどでもないですがそういうものでまとめてみました。

拙いものばかりな上に数も少ないですが、誰かの目に触れることができたなら幸いです。

これからも精進してまいりますので、よろしく願いいたします。

では、短いですが、あとがきを締めくくります。

たくさんの感謝を込めて――

2012.4.11

ひなた にこ